

資料紹介

6月12日～7月8日まで開催された恩納村史編さん事業 慰霊の日企画展「戦場となった恩納岳 少年兵 第二護郷隊のゲリラ戦」にて展示した資料についてご紹介します。

1点目は今回の展示会の開催に合わせ、沖縄市立郷土博物館から借用した機関銃です。1988（昭和63）年頃、恩納村字山田寺原、現在の国道58号東寺川橋の近くで発見されました。当時、恩納村には博物館施設などありませんでしたので、仲泊駐在所を通じて、沖縄市立郷土博物館に収蔵されたそうです。現状では長さ120cm、重量は30kgほどです。全体が錆びていますが、まだある程度の鉄自体の強度は保たれている状態です。また、表面は資料保護のため、コーティングされており、少し光沢感があります。山田には戦前に日本軍が、戦後には米軍が駐屯していましたが、どちらの軍のものかは該当する型がはっきり分からないため、現在、調査中です。この機関銃に関することや戦後のアメリカ軍の駐屯場所などについてご存知の方がいらっしゃいましたら、博物館まで情報提供をお願いします。



機関銃全体



引き金部分



戦時貯蓄債券



特別報国債券

2点目は戦時貯蓄債券と特別報国債券です。どちらも戦前に日本勧業銀行から発行されました。日中戦争、太平洋戦争と続く戦争の中、軍事費の増大は、増税だけではまかなえず、当時の政府は戦時国債の発行と貯蓄の増進にたよらざるを得なくなりました。特に民間から資金を調達するために発行されたのが、両資料です。展示の戦時貯蓄債券は5円で売り出され、償還の際には7円50銭が払い戻されました。また、毎年2回の抽籤で売り出し価格の150倍以内の割増金を付けることが可能であるとされていたよう
ちゅうせんです。一方、特別報国債券は1円ものものですが、

債券そのものは無利子とされ、償還にさいしては、毎年1回の抽籤で割増金を付けることが可能であるとされていたようです。戦争の長期化に合わせて、町内会などに購入金額が割り当てられるようになりますが、こうした資料からも当時の政府が戦争資金の調達に苦勞していたことがうかがえます。両資料とも博物館にて収蔵しています。

3点目はタンクブニです。航空機の燃料タンクを再利用して作られた舟です。その多くは沖縄戦後の物資の乏しい時代に、米軍の航空機の燃料タンクから作られました。展示資料は1972年頃に那覇市安謝から収集されたようですが、いつ頃から舟として使われたのかなどははっきりしていません。しかし、タンクに取り付けられているラベルによるとタンク自体は1962（昭和37）年にアメリカからの注文で日本の新明和工業株式会社が製造したもののようです。その後、取り外され、舟として再利用されたと考えられます。こちらの資料も博物館が所蔵しています。

